

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 板東洋介

本論文は、国学者賀茂真淵の中心的な人間観を「表現する人間」と規定した上で、それが、「労働する人間」をその人間観の基底とする徂徠学派の批判的継承であることを、両者の論争に関わる諸テキストの解釈と思想史的背景の分析を通じて解明せんとするものである。従来、両者の論争は、徂徠学派と本居宣長との論争の前哨戦として捉えられたり、中華主義対国粹主義、または政治主義対文学主義という固定的枠組で理解されたりするのが常であったが、本論文は、この論争を、流動化する封建社会において「近代的」人間像と共同体構想が先取的に模索される過程における、人間の生の意義の原理的問い直しの所産と捉え、この論争の倫理的含意と日本思想史における意義を検討している。

第一章では、前提となる徂徠学派内部の思想的分裂の析出過程を跡付ける。第一節では、先行する朱子学に対する徂徠学派の新しさを、儒教体系の総体（六経）を芸道的な技術体系としたことに見出し、第二節では、徂徠学派が、労働する多様な個性による人倫共同体という理想を掲げ、包括的な統治技術体系としての「先王の道」を主張したこと、さらに、労働と人倫に還元されない個の内的情念を、六経の中の「易経」や「詩経」を通じて一定の型に納めることで、共同体の内部に回収せんとしたことを明らかにする。第三節では、このような共同体構想が現実政治には所を得なかったため、徂徠学派の中に特有の「不遇」意識が生まれたことを指摘し、第四節では、政治主義的な徂徠学派における、不遇意識に端を発する文学的傾きという分裂を示し、この文学的側面の真淵への継承を指摘する。

第二章では、すでに明らかにした徂徠学派と対比しつつ賀茂真淵の人間観を検討する。第一節では、真淵がいくつかの個人的事情から、労働する人間の形成する人倫世界を離れた「隠者」であったことを確認し、第二節では、徂徠学派が「禽獣の世」とした日本の上代に、真淵が、人間の何によってもなだめ得ない個的情念（わりなき願い）の「直き」表出（歌）を見出し、徂徠学派に反駁したことを指摘する。第三節では、その「直さ」が武士道にも通じるものであることを説明し、真淵の古道論と武士道論との接合を図るとともに、徂徠学派の軍制論との違いが際立たせられる。以上を受けて第四節では、真淵の理想の人間像が、武力であれ歌であれ、自己の内的情念を率直に表出する文武両道として示されるのである。

本論文は、宣長との関係でのみ捉えられがちな真淵の思想の独自性を、徂徠学派からの批判的継承関係に注目することで明らかにし、同時に徂徠学派の新たな側面を浮き彫りにしている。用語法や概念規定に若干の不用意さがあつたり、真淵の思想的意義を宣揚するあまり徂徠学派の思想の捉え方にやや矮小化が見られ、また徂徠学派から真淵に継受された実質がやや不明瞭であったりするなどの課題は残るものの、本論文は、該博な知識に基づき儒学と国学という近世思想の中核をトータルに把握する視点を明示し、日本倫理思想史研究に一石を投じている。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。